

ネストル作『ボリースとグレープの殉教講話』 における両数の用法

黒 田 龍 之 助

I 序 論

I-1. 作品について

本論文は中世ロシアの聖者伝である、ネストル作『祝福されたる殉教者ボリースとグレープの生涯と殺害についての講話』⁽¹⁾ (以下『講話』と略す)の言語を、その形態論を中心に分析した結果のうち、特に両数の問題を考察した研究である。

この作品は11世紀の70年代から80年代初頭に、学僧ネストルによって書かれたと考えられている。ネストルはかの有名な原初年代記、すなわち『過ぎし歳月の物語』の編者の一人であり、また『洞窟修道院長フェオドーシイ伝』の作者でもある。彼は文学史上、中世ロシアで最初の歴史家と見なされており、当時一流の知識人であった。

この物語の主人公はその題名からもわかるようにボリースとグレープである。彼らはルーシの国をキリスト教への改宗に導いたウラジーミル1世の息子のうちの最も若い二人であった。1016年に父ウラジーミルが死ぬと、その息子たちの間ではキエフ大公位の継承を巡って争いが起こる。ボリースにもグレープにも大公位を狙うような政治的野心はなかったのだが、兄スヴァトポルクは二人を暗殺しようと刺客を送る。だが二人の侯は内紛による流血の惨事を避けようと、みすみす刺客の手にかかり、無抵抗のうちにそれぞれ殺されてしまう。ここまでが物語の前半部分であり、後半は無抵抗のうちに死んで殉教者として崇められるようになったボリースとグレープが、その死後にもたらした数々の奇跡の物語を伝えている。ストーリー展開は分かりやすくその描写も詳細で現実感に溢れるものとなっているが、ビザンチン聖者伝の伝統に忠実すぎて非個性的だという評価もある。

またこれと同じテーマについては、無名の作者による『聖なる殉教者ボリースとグレープの物語と受難と賞賛』⁽²⁾ (以下、『物語』と略す)がある。

キエフ・ルーシの文学の中でも重要な作品とされているこの『講話』につい

ては様々な視点より研究がなされているが、その傾向は大きく三つに分類することができる。まず『講話』の背景となる史実に注目した歴史および社会学的研究。次にボリースとグレープの殉教という行為を扱った宗教および倫理学的研究。そして『講話』と『物語』の比較、特にこの二つの作品間の関係や影響に関する研究である。これらについては数多くの論文が発表されているが、本論文のテーマではないのでここでは考察しない。⁽³⁾

中世ロシア語で書かれたテキストとしての『講話』に対するまとまった研究は著者の知る限りない。唯一スレズネフスキーが『中世ロシア語辞典』⁽⁴⁾の中でこの作品から多くの例を引用しているのみである。そこで本論文は全テキストをカード化することによって得られたデータをもとに、各種歴史文法書を参照しながらこの作品の言語の特徴を分析した。尚テキストはアブラモビッチ編『聖なる殉教者ボリースとグレープの聖者伝と彼らへの典礼』⁽⁵⁾に基づいている。アブラモビッチはこのテキストの校訂に際して、14世紀の『シリベストル集成』に含まれている写本をもとに、7編の写本の比較を行っている。⁽⁶⁾

I-2. 両数について

中世ロシア語では現代ロシア語と異なり、数のカテゴリーを3種類持っていた。即ち単数と複数以外にもう1つ、両数（または双数, dual, двойственное число）というのが存在したのである。

両数は以下のような場合に使用される。

a) 2つの対象を示す場合。これは数詞 дѣва, дѣвѣ あるいは оба, обѣ がある場合はもちろん、ないときでも文脈から2つのものを示しているのが明らかなきに用いられる。

b) 2つで対を為すような対象を示す場合。特に身体部分の名称でペアとなっているものに用いられる。（但しこれが3以上になるときは、当然複数が使用される。）

また両数が主語となる場合は動詞もそれぞれの時制に合わせて特有の活用をする。

両数の形態はその格変化において3種類しかない。即ち、主格と対格および呼格、生格と所格、与格と造格がそれぞれ常に一致するのである。

両数はかつてすべてのスラブ語の数のカテゴリーの中にあっただが、現在では廃れ、その多くが複数に取って代わられている。現代語の中では不完全ながらスロベニア語と、ドイツ・シュプレー川上流域の低地および高地ソルブ語に残

っている。但しスロベニア語では主格と対格（呼格はない）、与格と造格はそれぞれ独自の両数形を持つが、生格と所格（前置格）は各々の複数形に等しい。またソルブ語では所格が生格ではなく与格と造格に一致している。

現代ロシア語では両数の痕跡が次のようなところに残っている。

i) 対を為すものを示す名詞の複数主格形。

例：берега, бока, глаза, рукава; плечи, колени, очи, уши.

ii) 数詞2（あるいは3または4）と結び付くときに特別の力点を持つ単数生格形。

例：два (три, четыре) шагá, часá, рядá.

数詞 три, четыре も два, (две) と同様の形を要求するのは興味深い。この傾向は17世紀中頃までにモスクワで確立されたと考えられている。

両数の衰退がいつ頃から始まったのか、その時期を限定するのは難しい。おそらくは文献の書かれる以前からこの傾向があったと考えられる。しかし文献では13～14世紀あたりまで両数がふつうに使用されている。

II 『講話』における両数

この『講話』の中に現れる両数を品詞ごとに分類すると、次のようになる。

1 名詞 (93例)

a) 男性名詞	51例
b) 女性名詞	28例
c) 中性名詞	14例

2 代名詞 (77例)

a) 人称代名詞	3例
b) 指示代名詞	51例
c) 関係代名詞	4例
d) 所有代名詞	17例
e) その他	2例

3 形容詞 (135例)

a) 短語尾形	23例
b) 長語尾形	112例

4 動詞 (93例)

a) 直説法	61例
b) 命令法	7例

- c) 条件法 4例
d) 分詞 27例

この中から特徴的と思われることを以下にまとめる。

II-1. 『生格・対格』

活動体名詞、及びそれを修飾する代名詞、形容詞の両数は単数と同様に本来主格と対格の形が一致する。しかしこのテキストでは単数が新しい対格の形を生格から借用したように、両数もまた生・所格形を対格に用いていると考えられる場合がある。

Той множествомъ щедротъ своихъ яви намъ угоднику, страстотерпцю своею ... (103 б)

「(神は) その多くの慈悲により、下僕にして殉教者である (二人の) 者をわれわれに示された。」

И нача великымъ гласомъ предъ всеми славити ми и Бога и Его святою страстотерпцю. (106 г)

「彼はすべての人々の前で、わが神とその聖なる二人の殉教者を大声で賛美しはじめた。」

И прославиша вси Бога и святою Его страстотерпцю Бориса и Глѣба. (114 в)

「そしてすべての人々は神とその聖なる二人の殉教者ボリースとグレープを賛美した。」

Въспрянувъ же, прослави Бога и святою страстотерпцю, ... (115 а)

「我に返ると、(彼は) 神と聖なる二人の殉教者を賛美した…」

同様に形容詞短語尾形を使用している例もある。

...а святу сею Бориса и Глѣба у себе держащю. (92 г)

「…この聖なるボリースとグレープを自らのもとに置いた。」

『生格・対格』の問題は、単数と同様に両数においても判断を下すのが難しい。これは中世ロシア語の動詞の格支配や格の用法にまだ不明の点が多いことにもよる。

II-2. 形容詞の名詞化

形容詞の長語尾形のうち、名詞を伴わずにそれだけですでに名詞の役割を果

たしている形容詞が71例ある。

Блаженная же того наслѣдовала, ... (95 а)

「至福の二人のほうはそれ（＝神の意志）を受け継いだ…」

Святая же к тому не видима быста. (109 б)

「そして二聖人は見えなくなった。」

Рацѣ же святою постави въ церкви ... (107 г)

「二聖人の柩は教会内に安置された…」

Хожаше же и сий ко святыма на праздникъ ею. (110 а)

「この者もまたその祝いのために二聖人を訪れた。」

Повѣда ми яже о святою и о святемь отци Николѣ. (112 г)

「私に二聖人のことと聖ニコラのことを語ってくれた。」

など。ただしその用法においては単数または複数のそれと特に異なるところはない。

II-3. 形容詞長語尾形の生格, 対格, 所格語尾

生格, 対格, 所格の語尾は—ую と—ою の2種類がある。語尾—ую は古代教会スラブ語の形で, —ою は中世ロシア語における新しい形だが, その使い方にはほとんど差異がない。

生格:

—ую (15例): блаженую (89 а, 102 г, 103 г, 107 б), ближнюю (116 в), преблаженую (116 г) святую (95 в, 102 г, 103 б [2], 103 г, 108 г, 110 в, 113 г, 115 б)

—ою (42例): блаженою (102 б, 104 г, 105 в, 116 в), святою (89 б, 103 в [3], 103 г [2], 104 б, 104 г, 105 б, 105 в [3], 106 а, 106 б, 106 г, 107 б [2], 107 г [2], 108 а, 108 б [3], 109 в, 109 г, 110 а [2], 110 б, 110 г [2], 111 а, 111 г, 112 б, 114 а, 114 б, 116 а, 116 в, 116 г)

対格:

—ую (3例): блаженую (116 б), святую (108 г, 115 а)

—ою (10例): блаженою (103 б), святою (105 г, 106 г, 108 а, 109 а, 112 а [2], 112 в, 114 б, 114 в)

所格:

—ую (2例): блаженую (112 б), святую (104 а)

—ою (6例): блаженою (105 б), святою (105 а, 105 б, 106 г, 112 г, 115 в)

II-4. 動詞のバリエント

1) 動詞 **БЫТИ** のアオリスト 3 人称には、完了体アオリスト **быста** (4 例) と不完了体アオリスト **бѣста** (5 例) の 2 種類がある。

быста (109б, 115б [2], 115в)

бѣста (92в, 92г, 105г, 110г, 115в)

2) アオリストの 3 人称語尾は **—ста** が 44 例あって有力だが、**—сте** という語尾もある。(2 例)

покаястеса (109б)

слышасте (115в)

II-5. 数詞との結合

1) <2>

2 は必ず両数をとる。

двѣ звѣздѣ свѣтлѣ (92г) 「二つの明るい星」, **два уна** (113б) 「二人の若者」, **по двою дньню** (97г) 「二日後に」

2) <3>

3 は複数をとる。(〈4〉は例がない。)

трие мужи (113а) 「三人の男」, **три краты** (115а) 「三回」

II-6. 両数の複数による代用

述語となる動詞の一部が両数を複数で代用している例が見られる。(〔 〕内は予想される両数の形)

1) アオリスト

Святая же, имша за руку, въздвигша посадища и начаста глаголати о цѣлении его; таче приступиста и прекрестиста его, потом же пакы ногу его, и помазаша по ней, яко же масломъ, тянуща за ню. (112а—б) [посадиста/помазаста]

「二聖人はその手を取って彼を起こし、座らせると彼の治療について話し始めた。それから彼に近づいて十字を切り、その後彼の足にも十字を切り、その足を引っ張りながら油のようなものを注いだ。」

2) 能動現在分詞

Таче быша сынове мнози у Владимире, в них же бѣста святая сия... тако свѣтящеса акы двѣ звѣздѣ свѣтлѣ посреде темныхъ... (92в—г)

[свѣтящаяся]

「さてウラジーミルには多くの息子があつたが、その中に聖なる者が二人いた。…二人の光り輝くことと云つたら、まるで暗闇の中にある二つの明るい星のようであつた…」

Сиде же видяще блаженная отца тако творяща ... (93б—в) [видяща]

「二人は父親のこのような振る舞いを見て…」

3) 能動過去分詞

Скорая же врача и цѣлителя, имше же за сухую ногу и трижда прекрестивша ... (106б) [имша]

「速効医にして治療医である二人は、萎えた足を手に取ると、三回十字を切つた…」

この点についてはあとで再び考察する。

Ⅲ 他の作品との比較

以上『講話』における両数の特徴を見て来たが、それではこの結果を同じテーマを扱った他の作品と比較してみるとどうであろうか。本来ならばすべての品詞について検討すべきところだが、ここでは特に『講話』においてユレの見られた動詞について概観する。

比較するのは『講話』の他に、無名の作者による『物語』⁽⁷⁾ および『原初年代記』のラヴレンチイ写本第47葉の、ボリースとグレープの殺害に対する祈りの部分である。この三つの作品より動詞の両数だけを取り出して分類すると、次のような結果が得られる。

	[講話]	[物語]	[年代記]
1 直説法	61例	27例	13例
[a. 現在	7例	12例	9例]
[b. 未完了過去	7例	—	—]
[c. アオリスト	47例	11例	4例]
[d. 完了	—	4例	—]
2 命令法	4例	8例	11例
3 条件法	1例	—	—
4 分詞	27例	11例	26例
[a. 能動現在分詞	13例	5例	19例]
[b. 能動過去分詞	9例	3例	4例]

[c. 受動現在分詞 3例 — 2例]

[d. 受動過去分詞 2例 3例 1例]

もともと絶対量の違う文献なので、この結果を単純に比較することは出来ない。しかし例えば『講話』では直説法においてアオリストが圧倒的に多いのに対し、他の作品ではそれほどでもないことや、完了形は『物語』のみに見られるなど、いくつか特徴が浮かんでくる。

また II-6 で指摘したように、『講話』では両数形を複数形で代用する例が見られたが、『物語』や『年代記』ではこのようなユレはなかった。ただしこのようにあまりにも形式が整えられているのは、後の時代に規範に合わせるため形を直した可能性もある。そこで『講話』のようにいくつかのユレがあるほうがかえって古い文献であるとも考えられる。

IV 結 論

以上の分析結果より、次のようなことが考えられる。

この『講話』という作品はその主人公が二人ということもあって、両数が数多く使用されている。とくにその格の形態はほぼ規範どおりであってきれいなパラダイムを形成する。またその用法についても、『生格・対格』や形容詞の名詞化など基本的に単数や複数のそれと差はない。

しかし動詞では両数形を複数形で代用している場合がアオリストで2例、能動現在分詞で2例、能動過去分詞で1例の計5例が見られ、この現象はこの先時代が下るにつれて両数形が複数形へと移行していくことをすでに暗示している。またこの写本の書かれた14世紀は、文献の上でも両数が比較的によく使用される最後の時代であり、これ以降は徐々に使われなくなってくることを考慮すれば、これは非常に興味深いデータを提供してくれていることになる。ただしこれだけのデータより写本の年代を判定するのは危険である。

注(1) 原題は «Чтение о житии и о погублении блаженую страсотерпца Бориса и Глѣба»

(2) 原題は «Съказание и страсть и похвала святую мученику Бориса и Глѣба»

(3) たとえばこのような分野の研究に関する文献目録としては、Lenhoff, G. The martyred princes Boris and Greb: A socio-cultural study of the cult and the texts. Slavica 1989. pp. 143-159 が詳しい。また特にロシア・ソビエトで出版されたものについては、Словарь книжников и книжности Древней Руси.

вып. I (XI-первая половина XIV в.) Л. 1987 стр. 398-408 にまとまっている。

- (4) Срезневский И. И.: Материалы для словаря древне-русского языка по письменным памятникам. том. I—III reprint Gratz 1971.
- (5) Абрамович Д. И.: Жития святых мучеников Бориса и Глеба и службы им. Петроград 1916. ただし、一部明らかに誤植と思われるものについては、Сказание о Борисе и Глебе. Научно-справочный аппарат издания. М. 1985. の写真版を参照にして、訂正を加えたところがある。
- (6) ただし本論文では、Сильвестровский сборник のみを分析しており、他の写本については基本的に考察の対象としていない。なお写本については同書 стр. I-VII 参照。
- (7) 分析にあたっては『講話』と同様に Абрамович の校訂テキストを使用した。このテキストは12世紀に編纂された Успенский сборник に基づいている。ただし Абрамович は同書27—66ページに渡ってこの物語のテキストをあげているが、最近の研究では後半の奇跡の物語が後代の加筆であり、Сказание として認めないというのが一般的な見解となっている。たとえば Памятники Литературы Древней Руси XI-начало XII в. Л. 1978 もこの説に従っている。そこで本論文もこれに倣い、テキストの27ページから52ページ上から2行目までのみを分析の対象とした。

参 考 文 献 (注に挙げたものは除く)

Аванесов Р. И. Иванов В. В. Историческая грамматика русского языка. Морфология. Глагол. М. 1982.

Борковский В. И. Кузнецов П. С. Историческая грамматика русского языка. М. 1965.

Булаховский Л. А. Курс русского литературного языка. Исторический комментарий. Киев 1953.

Соболевский А. И. Лекции по истории русского языка. Киев. 1888.

Шахматов А. А. Историческая морфология русского языка. М. 1957.

Словарь русского языка XI-XVII веков. том 1-15 М. 1975. (刊行中)

Stender-Petersen. Anthology of Old Russian Literature. Columbia Univ. Press 1954.

福岡星児「ボリースとグレープの物語」『スラブ研究』第3号, 1959.

Употребление двойственного числа по тексту “Чтение о житии и о погублении Бориса и Глеба” Нестора

Рюносукэ КУРОДА

“Чтение о житии и о погублении Бориса и Глеба” создано в 70–80-ых годах XI века известным летописцем Нестором, автором “Жития Феодосия Печерского” и некоторых статей в “Повести временных лет”. По содержанию оно состоит из двух частей: в 1-ой повествуется о злодейском убийстве двух братьев, а во 2-ой — об их многочисленных чудесах. Язык “Чтения” ясный, подробный, образный. Композиционно Нестор следует традиционной византийской схеме жития.

Анализируя этот текст по списку Сильвестровского сборника XIV века, мы замечаем, что с морфологической точки зрения в нем очень часто употребляется двойственное число. Это категория числа, которая употребляется: 1) когда речь идет о двух предметах, причем количество может и не быть указано, если из контекста понятно, что речь идет о двух предметах, 2) когда существительное обозначает предмет, состоящий из двух одинаковых частей.

В данном тексте в формах двойственного числа употребляются 93 имени существительных, 135 имен прилагательных, 77 местоимений и 93 глагола. В принципе текст свидетельствует о регулярном и правильном по значению употреблении двойственного числа. Использование родительного падежа вместо винительного существительных, обозначающих одушевленные предметы, является морфологическим фактом в двойственном так же, как и в единственном и множественном числах. Окончание прилагательных родительного, винительного и местного падежей двойственного числа имеет форму старославянского типа (-ую) и древнерусского (-ою), а разница употребления между ними не ясна.

Колебания в использовании двойственного числа встречаются только в склонениях глаголов. Вместо двойственного числа в форме множественного употребляется 2 аориста, 2 причастия действительного залога настоящего времени и 1 причастие дей. з. прошедшего времени.

По сравнению с текстом “Сказания о Борисе и Глебе” неизвестного автора (по списку Успенского сборника XII века), только в “Чтении” наблюдаются колебания в использовании глаголов.

Так как “Чтение” по данному списку написано в XIV веке, можно предположить, что замена двойственного числа множественным постепенно

начиналась уже в письменном языке того времени. Но утверждать это окончательно трудно, так как в списках возможны исправления позднейшими переписчиками.